2018 年度
非文字資料研究センター
第 1 回公開研究会

宮古・八重山の御嶽と神社―近代沖縄の地域社会と祭祀再編―

主　　催：神奈川大学非文字資料研究センター「近代沖縄における祭祀再編と神社」研究班
日　　時：2018 年 7 月 7 日 (土）13：30 ～ 18：00
場　　所：神奈川大学横浜キャンパス 23 号館 206 号室
プログラム
開 会 挨 拶：総合司会：津田良樹（非文字資料研究センター客員研究員）
開 催 趣 旨：後田多敦（非文字資料研究センター研究員）
第 1 部　報告
報　　告　1：「宮古の御嶽と鳥居について～その背景を考える～」　下地和宏（宮古島市史編さん委員会委員長）
　　2：「御嶽の神々と八重山神社建設」　大田静男（石垣市立博物館協議会会長）
　　3：「ナナムイ」（宮古の祭祀映像）　比嘉豊光（写真家）
第 2 部　討議
コーディネーター：後田多敦
パネリスト：下地和宏　大田静男　比嘉豊光

報告

松山紘章
（歴史民俗資料学研究科博士後期課程）

「宮古・八重山の御嶽と神社―近代沖縄の地域社会と祭祀再編―」は、2018 年 7 月 7 日（土）に横浜キャンパス 23 号館 206 号室で非文字資料研究センターの 2018 年度最初の公開研究会として開催された。本研究会は、「近代沖縄における祭祀再編と神社」の共同研究班が昨年 7 月の第 2 回公開研究会として開催した「琉球・沖縄の御嶽と神社」の続編でもある。今回は、独自の文化圏を形成する宮古・八重山地域でどのように神社が創建されるに至ったのか。また、地域社会に根付いていた御嶽や祭祀と近代になり入ってきた「神社」がどのように関わり合い再編されたのかを、それぞれの地域で研究する専門家と宮古島での祭祀を記録してきた写真家の 3 名を招き報告してもらい、議論をした。

当日は、例年よりも早い梅雨明けで夏本番の暑い日でもあったが、研究会への参加者は、80 名近くにもなり会場となる教室はほぼ満席で関心の高さがうかがえた。

公開研究会は 13 時 30 分より開会した。津田良樹非文字資料研究センター客員研究員の司会で始まり、小熊誠非文字資料研究センター長の挨拶、後田多敦非文字資料研究センター研究員の趣旨説明の順で行われた。宮古島市史編さん委員会委員長の下地和宏氏、石垣市立博物館協議会会長の大田静男氏、写真家の比嘉豊光氏の順に報告をした。

津田良樹氏

小熊誠氏

報告者の略歴を紹介する。

下地和宏氏は、宮古島市（旧平良市）生まれで、2007 年に宮古島市総合博物館館長を定年退職して、現在は宮古島市史編さん委員会委員長、宮古郷土史研究会の会長を務めている。大田静男氏は、1948 年に石垣市で生まれ、石垣市立博物館協議会会長、石垣市文化財審議会委員を務めている。比嘉豊光氏は、読谷村出身の写真家であり、御嶽の祭祀などを記録している。今回は、宮古島で 1990 年代末頃から撮り続けた西原地区の祭祀の映像を報告する。

下地和宏氏

最初に下地和宏氏が、「宮古の御嶽と鳥居について～その背景を考える～」の題で、研究会の報告が始まった。

同氏の報告によると、宮古では御嶽が 40 カ所

あるとされる。また、宮古で「神社」と呼べるのは、多良間神社と宮古神社だけであると述べている。

宮古での神社の始まりは、漲水（はりみず）神社が御嶽から建て替えられたことが神社の最初ではないかとする。鳥居がないところもあり、最近建て替えた鳥居は朱色に塗られている。宮古における神社について次のように述べている。

漲水神社が漲水御嶽から神社へ建て替えられた時、背景には当時を伝える新聞によると、宮古では宗教思想に乏しいから神社創建が必要と説き、そのことにより、日本化への第一歩が進んだ。大正期の漲水神社について1918（大正7）年10月26日の漲水神社遷宮祭以前は拝殿やその他の施設がなく、小規模であった。しかし、立津春方が寄付を募り、拝殿を奉納した。遷宮祭の余興には1万人余の観衆が集まった。

1902（明治35）年に竣工した多良間神社については、進藤栄（多良間尋常小学校訓導兼校長）が赴任して校舎の改築を無事に終えたのは島主土原豊見親の御加護の賜物として、島の守護神のおかげだとして神社の創建となり、宮古圏初の神社となった。また、地元では、一般的に呼ばれる神社（じんじゃ）ではなく、「じんしゃ」と呼ばれていることを紹介した。

1923（大正12）年に池間御嶽は「大主神社」に改築されたが、「御嶽由来記」は池間御嶽と記載されている。「大主」の名は祭神「オ(ウ)ハルズ」から来ている。

阿津真間御嶽は、1935（昭和10）年に「阿津真間神社」に改築された。その建設にあたり、建設委員は政界や経済界から成り立っていた。委員長には県議会議長、副委員長は元平良町助役、委員は医師、歯科医師、酒造業など有力者であった。

宮古神社は、地元の英雄である與那覇勢頭豊見親及び仲宗根豊見親を祀るため、1925（大正14）年に創設された。平良町長は宮金氏、與那覇恵春は白川氏、仲宗根玄純は忠導氏を祖先に持っており、與那覇勢頭豊見親は白川氏、仲宗根豊見親は忠導氏の祖先である。その後、1940（昭和15）年9月には宮古郡神社奉賛会が設立された。その会長は宮古支庁長、副会長に平良町長がついた。評議員は教育者や元県会議員、町会議員、新聞社の社長など地元の有力者11名であった。

奉賛会では、宮古神社の県社への格上げに伴い、権現堂祭神と與那覇勢頭豊見親、仲宗根豊見親を宮古神社に合祀することに賛成していたが、立津春方は宮古神社の合祀へのあり方に疑問を持ち合祀に反対した。

戦後には、1952（昭和27）年に長間神社、1969（昭和44）年には下里添神社の改築があり、サトゥヌ御嶽などでは八角柱の鳥居や四角柱の鳥居も見られる。1983（昭和58）年には真玉神社が造られている。戦後の鳥居は、地域的に広がりを見せ、鳥居や灯籠は御嶽の象徴となりつつある。

次に大田静男氏が、「御嶽の神々と八重山神社建設」と題して報告をした。

報告ではスライドを用いたが、現在でも八重山の神々は録音や撮影、記録を一切禁止されているところもあり、勝手に入ってはいけない御嶽もある。

大田静男氏

最初に八重山の神について報告をした。例えば、イビは神のいる場所であり今も信仰されている。牛馬の繁盛や病気にかからないようにと健康を願う。

ウブ(重要な聖域)の中で神聖であったのがイビであった。ウブは男子禁制である。ウブの中にイビがあるため、中のイビが見えないように隠してある。

祭事ではツカサと呼ばれる女性を中心に行われる。ツカサは神様への願いが通らない時は御馳走の全てを取りかえる。ツカサは神に仕えているのでなく、強い存在であった。

八重山では、発掘すると遺跡から人骨が出土するが、柱（跡）の下に埋められている。17世紀まで屋敷に人を埋める風習があった。それは、石を立てると神が降りると伝えられているからだ。そのため骨の上に石が置いてある。しかし、与那国でも石を立てるが墓ではなく、その意味は分かっていない。八重山では、石を人骨の上に置いて死者と深いつながりを持っていた。八重山の神は、天から降りてくる。イビに降りてくる話もあるが、地の底つまり洞窟から出てくることもある。

琉球処分後も伝統は残るが、近代に入ると八重山にも神社を建立する動きが出てくる。明治時代になり、1891（明治24）年頃に八重山製糖の創業により徳島県から移住者が入った。移住者の流入により近代化の中で外から神様が持ち込まれる。

その後、八重山で1932（昭和7）年に教員赤化事件が起きる。教員組合の運動が弾圧される。警察（特高警察）の裏で軍隊の関与が見られた。地元の八重山義勇軍の在郷軍人会が民主的な人を「共産党や赤」だと弾圧した。精神作興運動で天皇制の転覆の動きがあったため、八重山にも思想的な人間を徹底して弾圧していこうとする流れがあった。そうした中で、1935（昭和10）年に八重山神社創建の動きが出始める。戦火が激しくなると紀元二千六百年ということもあり八重山神社を造ろうとなり、それは八重山郡振興でもあった。地鎮祭は行ったが戦局により神社はできなかった。

神社が造られなかったのは、前近代の八重山は統一政権ができる前に首里王府の支配下に入ったため、（宮古のように）祀る英雄がはっきりとしないとの背景を挙げた。

今、石垣島では御嶽の森の木が切られたり、土地がリゾートに売られたりしている。八重山の神様への観念が変わってきている。だが、1600年代に禁止された神職や祭りが今も続いている。神への観念は簡単に消すこと

はできないと述べた。

3人目の報告者である比嘉豊光氏は、「ナナムイ（宮古の祭祀映像）」の題で、宮古島における祭祀の映像を用いて、地域社会で受け継がれている祭祀の様子を報告した。題にも付けられているナナムイとは、神が宿る七つの御嶽を総称して「ナナムイ」という。そのナナムイの神事を長年追い続けている。報告時に放映した映像は、1997（平成9）年頃から宮古島に通い撮影をした。視聴したのは神事を司るのが女性のみの男子禁制の御嶽で、11月に当時の平良市西原で行われたユークイ（世乞いの掃除）の3日間の行事であった。村の幸せを込めて願われた祭祀である。

比嘉豊光氏

映像の時間は80分であるが、そのうちの約40分を視聴した。夜の神事が始まる前の昼間の供え物を作り準備する段階から女性達を撮影していた。夜は女性達の願いを唱える姿には神聖でかつ厳かな雰囲気であった。視聴者にもまるで祭祀の場に立ち会うかのように伝わってきた。また、他の御嶽で行われたユークイも視聴した。

同氏によると御嶽の祭祀には様々な種類がある。一例を挙げて、学校内にある御嶽で祭祀をする学校ヌヤシキダミニガイ（学校の屋敷鎮め願い）、受験の時には、勉強が上手くいくように願いをするシートゥニガイ（生徒願い）があることを紹介した。今でも、日常生活の中には神様がおり、祭祀が行われている。

また同氏は、宮古島における御嶽での祭祀は47あり、年間にすると70日から80日ほど御嶽に入る行事があるという。御嶽に入るのは、主に女性ではあるが、年に3回は男性が参加する行事も存在すると説明した。

撮影を始めた当時は祭祀を司るカミンチュが40人ほどいたが、現在は3名以下になっている。そのため、行事の担い手が減少している。また、地域に伝わる祭祀が失われかけていると現状を述べた。

第1部の報告が終わり、参加者から寄せられた質問等を含め第2部では討議が行われた。主な内容を整理すると以下のようになる。

宮古・八重山地域の神社及び祭祀に対して次の考えを示した。

下地氏は、「戦後に御嶽に鳥居が多くなる。例えば、自分達が信仰する御嶽の入り口と自分達の生活を明確にする意味で鳥居を建てた。鳥居を建てる資金もあった。人々には、御嶽も神社もある」と現状を解説した。

大田氏は「紀元二千六百年に合わせて創建が計画された八重山神社は、宮古とは違い先に権現堂を祭っている。戦時中には八重山の神を拝む人は戦勝を祈願したが、神は日本が負けると神のお告げがあった」と説明した。

危機感として「現在の人は、神の声は聞こえていないのではないか。それは、自分（達）の山々が壊されそうな時に先頭に立っていない。失われる歌も多すぎる。若い人が歌わなくなっている。CDでしか残らない」と述べた。

比嘉氏が撮影した映像への感想について話が出た。

撮影をした比嘉氏は、「映像からカミンチュは100%女性であり、それ自体（女性が神事を司る）が神行事であった。女性がいないと世の中は上手くいかない」とした。

後田多研究員は、「1879（明治12）年に沖縄県となってからも部分的ながら独自の祭祀制度が維持された。また、近代になって沖縄に建てられた神社は、海外神社と同じ意味を持つ。映像の祭祀は琉球・沖縄の祭祀と一般化してとらえずに、この時期の宮古での祭祀だということを意識した方がいい。近代の中で祭祀も大きく変化している」と述べた。

後田多敦氏

下地氏は、「料理の作り方がダイナミックであり、お祭りのような気がした。」

大田氏は、「神に対する深い信仰があり、地域が表れている。歌も大らかさが表れていた。女性が多く参加して踊り歌うのは八重山では見られない。」

比嘉氏は、「（料理は）祭祀の前からは準備する。また、その間の男性については（祭祀の内容により参加することもあるが）祭祀前は酒を呑んで過ごしている。」

下地氏は、「行事は神から選ばれた女性、主に祈願をする。男の人は一年間の神行事はこの日だけは御嶽の木を伐採して整理しましょうという日があり、村の男の人が整理するという日がある。ただし、今、ある地域では女性の神役がいなくなり、後任もいなくなり、止めにするかとなっている。部落会の男達が祈願するところもある。」

大田氏は、「（八重山では）ツカサの男性はイビのところに入ってはいけない。お手伝いは、拝殿のところで、ツカサの後ろで銅鑼や太鼓を叩いている。」

以上が、映像報告での議論であった。

宮古・八重山の神社と御嶽はどのように違いがあるかとの質問も寄せられた。

下地氏は、「宮古にある神社は二つであり、あとは御嶽である。部落（地域）の主たるは御嶽である。1890（明治23）年に教育勅語を、すでに小学校でヤマトの人が教えていた。神社も御嶽も宮古の人が音頭をとり、宮古島の士族がいることも背景にあったのか。御嶽を神社化ができたのは、時代がなせることであり、鳥居が立っているがとってしまえとはならない。部落の人達には大事

だよ。現在は、宮古では神社に対して戦前のような考え方はない。神社と御嶽をごっちゃにしない方がいい。」

大田氏は、「石垣島に神社はなし。石垣島には後から開拓移住者により金毘羅が入った。御嶽の形態は神社と同じではないか。鳥居は、民衆から立てろということはないので、役人の権威によるものではないか。」

比嘉氏は、「読谷には神社はないが米軍基地の入り口にある（トリイステーション）。鳥居は神社でも御嶽でもない基地にある。アメリカが鳥居の構造を知っていたのか。」

下地氏は、「宮古の中には、鳥居がなく灯籠があるところもある。戦後、御嶽も再編の話があったが、実際には再編はされていない。」

議論の結果、三者の地域での違いであった。

ここからは、参加者の感想の一部を抜粋して紹介したい。

「神に対する心的態度、時代性など、ゆっくり考えることができました。地元でしっかりとフィールドワークをしている先生がいらっしゃるからこそ、また、この点に着目してシンポジウムを開催してくださる団体があればこそだと思います。」

「画像を見られたのはよかった。ウタキと神社の関連性が分かった。ナナムイの映像は、よりカミンチュの行動が分かり、続きを見たいと思った。継続していく難しさもあると思うが、復活させる祭りはあるのか知りたい。」

「御嶽と神社を宮古と八重山の両面から学ぶことができました。もっと深く知りたい気持ちでいっぱいです。もっと時間が長くて良いと思いますが…御嶽と神社の関係が少し見えてきました。沖縄における変化も少し見えてきましたが、日本になくなった祭祀の多くが、崩れてきていると思います。悲しく思います。これからますます研究していく必要があるように思います。」

「内地とは違う、そして海外(植民地)神社とは少しニュアンスが違う琉球における神社、そして八重山を中心にした信仰と神という信仰の関係について関心があるので、参考になります。災害と神社の関係についても知りたいです。」

「信仰の神道、強制は難しいと感じました。沖縄・琉球の信仰を超える普遍性を神社(神道)は持っていなかったと思いました。今後、継承者がいなくなった信仰は、消滅して人々は個々に他の信仰に移っていくものと思います。」

「海外（ヤマトでない、という意味）神社に関わるシンポをいくつか聴きましたが、宮古・八重山では事情が全く違うのが印象的です。前者では支配者の意向で神社ができたが、後者は成功していないようです。琉球王府がなくなり、土俗化したという話も初めて聞きましたが、代替できるだけ土俗の方が強いと感じました。今後どうなるのでしょう。」

「祭祀の映像を見て、祭祀を行うことは介護予防につながるように思えたので、女性は元気で長生きなんだと思いました。」

「3 人の講師の方々のお話はそれぞれのテーマや切り口が異なり、大変興味深かったです。宮古と八重山での違いも感じられ、個々の地域に着目することの大切さを改めて感じました。」

また、全ては紙幅の都合で紹介はできないが「大変勉強になりました」、「なかなか聞けない話が聞けて面白かった」、「宮古・八重山の神社の位置付けは、距離的に近いようで異なることを初めて知りました」、「御嶽の神社化について考えさせられました」、「その他の諸島の祭祀の映像も見たい」、「明治政府によって、明神も天神も神社にされたことを思い出しました」などの感想も寄せられた。感想から宮古・八重山での祭祀や御嶽、神社への関心の高さが改めて分かる。

暑い中多くの人が駆けつけた

＊

最後に、研究会の内容をまとめると以下のようになる。宮古・八重山地域には、近代以前からの祭祀文化が根付いていた。そこに、明治時代以降「神社」という「日本」の建造物ないし祭祀が持ち込まれようとした。ただし、確実に各地に広まってはいないと報告や映像から理解ができる。

宮古では、地元の有力者が神社の創建に携わり、神社が造られるものの御嶽もある。映像からの報告で、祭祀が地域の行事として面々と今へと受け継がれていた。しかしながら、伝統的な祭祀は神役の減少により厳しい状況に置かれている。

八重山には、近代以前からの御嶽や祭祀が脈々と残り続いている。神社に関しては近代になると本土から移住者も入り、時代の流れとともに創建の話が持ち上がるが、最終的に神社は造られず今日に至っている。つまり、土地に根付く祭祀や御嶽が住民に支持されていた証左であろう。

「神社」を造ることで、祭祀や祭礼の面から日本の国民として統合しようとした。これまでの海外神社研究の対象となった旧満州、台湾、朝鮮、南洋、樺太だけではなく、沖縄県の宮古・八重山地域にも同じような構造が見られた。

その点で、沖縄における神社研究は、我が国の歴史を考える上で今後も必要な研究である。